

地域婦人会・女性会の 防災/減災活動

中央防災会議・災害被害を軽減する国民運動の推進に関する専門調査会
第3回 報告資料 (2006.3.1)



全国地域婦人団体連絡協議会 事務局・浅野幸子

地域の女性と防災

- ・ 主に、自治会や校区、集落単位で地域に根ざした活動を行っている、女性たちの組織
- ・ 家庭防火・地域防災にも心を砕いてきた
- ・ 市区町村・都道府県単位でネットワークをつくり、全国の連絡協議会として連動して活動
- ・ 地婦連の女性たちの取り組み分野
→ 暮らし・社会をトータルで感じ考える視点



全地婦連の取り組み分野



事業計画書より

- ① 男女共同参画社会の実現 (男女共同参画基本計画の具現化/
女性のエンパワメントと人権問題/防災)
- ② 提言活動 (提言活動/女性と政策・政治)
- ③ 住民自治 (市町村合併問題/住民参加・地域自治/地方分権)
- ④ 地域社会活性化 (地域主体のボランティア・市民活動/仕事と家庭/
地域活性化/文化の継承)
- ⑤ 消費生活 (消費者運動/消費者教育/企業の社会的責任/IT社会への対応)
- ⑥ 環境・食生活 (環境問題/公害対策/省資源・エネルギー対策/食の安全)
- ⑦ 教育・子育て (子育て支援/少子社会対策/青少年健全育成/子どもの権利)
- ⑧ 福祉・健康 (社会保障/高齢者・障害者/結核・エイズ対策)
- ⑨ 平和運動 (平和運動/国際交流・協力)
- ⑩ 北方領土返還要求運動



くらしの安全・安心

日常の防災活動から・・・

(2004年度全地婦連・全国研究大会 活動事例報告集より抜粋)

- 「ひとり暮らし老人の見守りあいネットワークに参加。特に障害を持った人への注意・配慮を心がける。」
(神奈川県・川崎市大師地域女性連絡協議会)
- 「家庭から火を出さない」を合い言葉に消火器の使い方など、基礎的な防災訓練から、地域単位で実施される防災関連の訓練・講習等に積極的に参加し防災意識の高揚を図る。年間事業計画の中で訓練日等を明記し、団体事業の一環として積極的に取り組んでいる。」
(岐阜県地域女性団体協議会)
- 「防火思想・火災予防知識の普及、講習会の開催、家庭用消火器の備え付け及び指導。青少年の災害意識・対応力の向上、避難場所の確認・周知などが課題」 (秋田県・鷹巣町婦人消防協力隊)

○「市内の208の町内会婦人会が、年7回の防災訓練を行い、その中で、危険箇所や避難場所の確認、応急手当の訓練などを重ねている。」
(鹿児島市地域婦人団体連絡協議会)

○「中宿地区では自主防災会の組織そのものの再構築を行なう。地区を20のブロックに分けて、行政職員OBや自衛隊OB、消防団OBに、防災リーダー・サブリーダーをお願いした。更に市の指定避難場所とは別にブロックごとの集合場所を決め、第1次的にブロックごとの避難状況を確認。その時点で災害弱者の救援等に協力して対応するなどのルールを定めた。」
(山梨県・中宿自主防災会)

○「災害時の想定で津波が10mまで襲ってくると考えられる地域の、近隣10～15軒を1グループにし責任者を置いて報告体制をつくる。情報の一元化はしっかりした組織作りが必要。組織的情報担当が各地区に求められる。」
(愛媛県・大島および四波婦人防火クラブ・真穴地区自主防災組織)

青少年健全育成&防災

大阪府地域婦人団体協議会・青少年部

「地域ぐるみで青少年の健全育成と子育て支援を
～ 見逃すな！小さな変化が非行の始まり」(年間テーマ)

次の4項目で大阪府内各市の部会がそれぞれの活動に取り組み、「子どもたちの居場所づくり」にも大きな役割を果たしています。

- (1) 地域の子どもたちや若いお母さんたちに
あいさつをしていこう
- (2) 地域で、積極的に子育て支援活動に取り組もう
- (3) 青少年にかかわる行事に積極的に参加し、
青少年育成団体とのネットワークの中で、
情報の交換や啓発活動に取り組もう
- (4) ひたたくり撲滅活動の展開

大阪府・寝屋川市婦人協議会

毎年の年中行事で、市内小学校の夏休み最後に
「マイぞうきん」づくりと防災体験

新学期には自分たちで作った「マイぞうきん」を持っていこう、と小学校高学年の子どもたちに呼びかけ、3カ所の小学校の体育館で会員が教えながら仕上げます。低学年は牛乳パックで野球帽作り。

朝から作業に取り組み、昼食には災害時に備えた非常食の炊き出し訓練、できあがったアルファ化米を食べ、午後は映画会や水鉄砲づくりをしました。



毎年恒例の取り組みとなってきたため
上手に縫えるようになった6年生は
下級生に自発的に教えてあげていました！

さらに応急手当普及員の資格を持つ会員が中心になって、応急手当の講習もしましたが、150人あまりの児童と保護者が参加しました。初めて体験する人も多く、とても感謝されました。



2日間で500人あまりの親子が参加し、夏休みの最後をお手伝いでき、婦人会会員のみなさんも感動しています。子どもたちに会おうと「ぞうきんのおばちゃんや！」とあいさつしてくれます。

今後も私たちの活動が、「夢ひろがる地域社会づくり」につながるよう努力していきたいと思ひます。

(田中会長)

地域連携/人権/学び&防災

岐阜県・岐阜市本荘校区婦人会(いこまい会)

長期間地域の女性が参加してきた「女性学級」を、「行こまいかい!」と、ご近所で気軽に誘いあつて参加してもらおうと本荘婦人会「いこまい会」に名称を変更、再出発。会の目的は「地域女性が楽しく参加し、コミュニケーションを図りつつ生活に即した学習活動を行う」こと。昨年はテーマを「防災」に。

2004年2月、いこまい会で企画を固め、自治会に参加の依頼をしたところ、自治会事業・公民館講座と共催の「地域防災片戸端会議」へ発展。

1回目(4月28日)は、自治会関係者も含めて70人が参加。「地域内防災について」中消防署から東海地震などの岐阜市の被害予測や耐震診断・補強等の基礎的な話を聞きました。

また、グループに分かれて①身近な気づき(家の中)②地域の連携(ネットワーク)③情報収集と発信、をテーマに討論。

次に家具の転倒、住宅の壁のひび割れ、ベランダの植木鉢の落下など、身近な危険要素を出し合いました。

参加者は、火災発生時の冷静な対応の必要性、高齢者・乳幼児などへの配慮、避難経路の確認、地域のネットワークづくりや普段からのお付き合い、声のかけ合いの大切さなどを再確認しました。

2回目は「相手を知ること…避難所にて」と題し、障害者など弱者の存在を考える<人権学習の視点>を取り入れました。

3回目は体験学習で救命法や避難所・避難ルート・非常食について、4回目は名古屋市防災センター視察など全6回の企画。

負担感の少ない参加費の設定、身障者施設で作っているゴキブリ団子を粗品とすることで社会還元活動、手芸教室といった楽しい企画など、企画全体にいろいろな要素が盛り込まれていました。



地産地消/食育&防災

京都府連合婦人会・宮津市連合婦人会

① 台風23号で支援者・避難者をつなぐ食事づくり

京都府宮津市連合婦人会では、2004年秋の台風23号が宮津市を襲ったため、10月27日から11月5日までの毎日、昼食と夕食を一日に2回、被災者へ届ける配食サービスを行いました。

毎日10人前後の京都府連合婦人会員が、ローテーションを組み、地域の食材を使って10日間の献立(昼・夜2食×10日=20食)を考え、調理して搬入。

衛生管理も自主的にチェックポイントを決めて行い、できた献立も検品用として5日間保存しました。

全国各地の婦人会・女性会では、地域の食材を生かした親子料理教室や、伝統料理の継承、学校の総合学習の時間での料理指導、地域での栄養改善啓発、学校給食への地元食材の取り入れの働きかけなど、食に関する多様な活動をおこなっています。



② コミュニケーション・きずな

さらに婦人会員は、避難者への配食を済ませたあとでごいっしょに会話し、被災のご苦労の一端を分かち合わせていただきました。

活字に起こせば数行の話ですが、京都府連合婦人会・宮津市連合婦人会の「食事づくりとコミュニケーション」活動は、広がりをもって、支援者・避難者双方をとり結ぶ活動ともなりました。

活動を終えた会員からは、「お互い、教えられたり教えたりして、人と人の絆がより強くなったように思われます」との感想が。

そして避難していた子どもさんからは「家に帰ってみると、なべもれいぞうこも半分土にうまっていたのでびっくりしました。このとき食べたごはんのことは、大きくなってもらえないとおもいます」と、感想とともに感謝の寄せ書きを贈ってくれました。

(栗田会長)



消費者問題対策 & 防災

佐賀県・佐賀市北川副校区婦人会

竜巻の襲来！～救援活動と同時に、詐欺に注意の呼びかけ

2004年6月27日(日)朝、竜巻の被害が発生。朝食も食べていない人も多いと考え、被災住民に対して炊き出しを行いました。翌日からは、支援活動を行いますというチラシを作成し、ボランティアを募集しながら、ガラス磨き、たたみ拭き、ガラスの破片拾い、子守り等の活動を展開しました。

同時に、悪徳業者が入ってきたとの情報も得たことから、このチラシにはクーリングオフ用のはがきもつけたため、詐欺の被害は最小限に食い止められたと考えている。

地域では大変喜ばれました。他団体との連携の成果もあったので今後につなげたい。

地域婦人会・女性会は、消費者問題が社会を大きく揺るがし続けた1960年代から、消費者運動にも取り組み、地方消費者行政ともかかわりがあります。問題を察知し対応するために必要な感覚を生かし、たとえば高齢者が詐欺被害にあわないよう日常的な呼びかけなども行っています。



地域文化 & 防災

和歌山県・和歌山市鳴神団地婦人会

“稲むらの火”を、和歌山のこぼで語り部する

和歌山県の、かつて比較的裕福な層の女性たちが使った方言は、たいへん上品で情感があります……。そこで、戦前は小学校の教科書にも掲載された有名な“稲むらの火”のおはなしを、地元の研究者がその和歌山の言葉で書きかえました。これを民話の語り部活動をつづけてきた婦人会員が、語っています。



やわらかで切々とした語りは、聴くものところに、染み入るように伝わってきました……。

※「稲むらの火」…江戸時代に、地震のあと、海の様子から津波が来ることを予想した村人が、高台の刈り取った稲を積んだ束に火を放ち、様子を見に高台に集まってきた村人を、津波の被害から救ったという実話をもとにしたおはなし。

男女共同参画 & 防災

新潟県地域婦人連盟ほか

昭和39年の新潟大地震でおこったことを、女性の目で評価・記録

『新潟地震と私たち』p60より

「対策本部に女性が一人もいなかったのが失敗だったと思います。女性がいたら、被災の赤ちゃん用にミルク、オムツと細かいことにも気がついてお母さん方の苦しみを少なくすることができたでしょうに。」

今の社会は、役職などに男性だけがつきすぎています。地震対策本部に婦人を加えるのを忘れるようなことは、どこから出てきたのか反省して、お互いのしあわせのために婦人の力を発揮することを、みんなで研究しましょう」

昭和40年3月25日
新潟県教育委員会・新潟県婦人連盟・
新潟県選挙管理委員会 発行



全地婦連と加盟団体

政府の“男女共同参画基本計画”の見直しにあたっては他の分野とともに、防災分野についても意見を提出しました

- 男女共同参画の視点を防災・復興の全政策プロセスにおいて取り入れ、実行可能な体制を確立してください。(地域での防災・復興活動を含む)
- 防災・復興対策は、男女のニーズに違いもあることをしっかりと把握し進める必要がある。被災直後から、女性にとって最低限必要な環境整備および治安上の不安の除去が行われることは、男女共同参画はもちろんのこと、基本的な人権の観点からして防災政策上当然の責務と考えてください。

国立女性教育会館(ヌエック)主催の国際フォーラム「災害と女性のエンパワーメント」に出席して、学習とネットワークづくりを深める



地域自治/市町村合併&防災

北海道・虻田町婦人団体連絡協議会



有珠山噴火で、避難所における自主組織の活動

「全町のほとんどが、他町に避難し、自衛隊・赤十字・たくさんの方のボランティアの方たちの支援をうけたが、自分たちのできることは自分たちでと、自治組織が各避難所にできた。班組織で炊飯、外注したおかず配り、ごみ処理などの日常の細かいことの取り決めと取り組みを行う。人と人のつながりの大切さが実感できた。

コミュニケーション、思いやりの大切さも実感できた。

半年後、自宅に戻ってから有珠山火口ガイドボランティアや、温泉街復興の取り組みに積極的に参加した」

岩手県地域婦人団体協議会



市町村合併でも「ブドウ型」組織で地域にしっかり根差しつつの広域連携を

災害時こそ身近な地域が大切…。合併で地域は？

「7月21日、歴史ある第45回西磐井地方婦人大会（一関市、花泉町、平泉町の各婦人団体が参加）を、一関文化センターで開催、120人あまりの婦人会員が参加しました。

町村合併を迎えるため、意見交換では婦人団体の体制についても話題となりましたが、合併後も各地域独立した活動を行っている例が県内にあることから、体制について当面は現状を維持していこうとの意見が出されました。

瀨川智子・岩手県地域婦人団体協議会会長は「合併はありますが、婦人会はやはり地域に根ざしながら、それぞれの地域のカラーを出したブドウ型の組織として、これからも一緒に柔軟に活動していきます」と、県下の各婦人団体に日常的に呼びかけています。」

（財）日本防火協会『婦人防火クラブリーダーマニュアル 訓練・実践編』より

高知県・大月町婦人防火クラブ連絡協議会

豪雨災害で救援・復旧の地区連携プレー

平成13年9月5～6日にかけての秋雨前線の活発化で、高知県西部が局部的な豪雨に襲われました。

9地区からなる山間部の大月町では、床上149棟・床下浸水240棟、ほぼ全域で停電・電話の不通・断水となり、一時完全に孤立する地区も出ました。

厳しい状況の中、大月町婦人防火クラブ連絡協議会（9地区・250人）では、各地区のクラブ員が自主的に被災した人や復旧活動にあたる人たちのために、住民と協力して炊き出しを行い、避難所の避難者や、高齢者の家庭などへ食事を配りました。

もちろん復旧作業も精力的に行っています。使えなくなった畳、家具の運び出しや、食器の洗い流し、土砂の取り除き、建物や床下の消毒などです。

大月町内の各地区の婦人防火クラブの活動報告から

A地区

9月6日、午前8時に区役場に集合。断水・停電のため、昼食用の炊き出しを開始して、地区住民・避難所へ配布。7・8日は復旧作業を行う一方で、一人暮らしの高齢者や浸水した家庭、出動している消防団員への炊き出しを行った。

B地区

9月6日の昼食・夕食、7日の朝食・昼食の炊き出しを避難しているひとびとに行う。9月7～10日の4日間、全域が浸水したもつとも被害の大きい周防地区の復旧作業のため、延べ15人のクラブ員を派遣した。

C地区

9月7・8日、地区内の浸水した家庭の復旧作業を手伝い、支給された毛布の配達を行う。同時に両日とも、周防地区への炊き出しのため、クラブ員を派遣した。

被災した高齢者のお宅に巡回訪問を行ったことは、みなさんの大きな心の支えとなりました。今回の経験を無駄にせず、来る南海地震に備えて、知識を深め、被害防止対策や応急救護・救助法の習得を進めるなど、日々防災活動に取り組んでいます。

(財)日本防火協会・防火ネットニュース2004年11月号より

静岡県浜松市・江西地区防災フェスティバル 浅間婦人防災クラブ

防災はみんなで奏でるシンフォニー♪

2004年10月、素敵なテーマで、特に音楽を通してたくさんの地域住民の参加と、実践的な防災意識を高めてもらえる防災の場づくりを目指したのが、静岡県浜松市内の江西地区です(10町会で構成)。会場は、浜松駅から徒歩15分ほどの住宅街の中部地域の防災拠点でもある浅間小学校です。

江西地区自治連合会・浜松市消防12分団・浅間婦人防災クラブの共催ですが、特に企画の立案・実施にあたっては、多様なアイデアや、地域内外のネットワークの活用など、今年結成25周年を迎えた浅間婦人防災クラブが大きな役割を果たしています。たくさんのお子さん、若い親御さんたちが参加していました。



浅間小の金管バンド

ちびっ子レンジャーに挑戦

幼年消防クラブの演奏にあわせて、浜松市消防12分団のメンバーも踊りました

(財)日本防火協会・防火ネットニュース2006年1月号より

新潟県・小千谷市婦人防火クラブ

資源・リサイクル活動と“災害時広報”実践

2004年の新潟県中越地震で、小千谷市上ノ山地区婦人防火クラブでは、災害時には正しい情報を伝えて不安と混乱、デマを回避しなければならないと、即時に災害時広報に自発的に取り組んでいます。

クラブ員は日ごろ地域で、ゴミの分別・リサイクルがきちんと進むよう、自家用車にスピーカーをつけて町内の巡回もしていたため、これを使って、地区の災害対策本部と連携しながら、必要な情報を地区に丁寧に広報したのです。その内容は、配給の時間や場所、お風呂に入れる場所と時間、ゴミの分別方法から、医療を受けられる場所、下水道を使わないようにとの注意など、多岐にわたっています。

そして広報する際には、人の声が被災者に与える安心感というところをしっかりと意識しながら、ゆっくりと丁寧に話し、また、途中で質問されてわからなかった事については、本部に戻って情報を確認してから伝達することを原則としました。

若い親御さんの声：「昨年は主人が参加して、応急救護訓練を受けるなどしました。ことしはわたしと子どもが参加したわけですが、このようないざという時の心構えやちょっとした技術がわかるという場合は、とても大切ですね」



応急救護の実技



お父さんたちもバルーン作り



スモークハウス体験



アルファ化米でのカレーの炊き出しと配布



消防音楽隊



校庭の中心で幼稚園(幼年消防クラブ)の鼓笛隊・小学校の金管バンド・消防音楽隊が演奏。それを囲むようにスモークハウスやちびっ子レンジャーなどの体験コーナーが設営され、体育館前に置かれたさ起振車を経て、体育館での展示・応急救護訓練などに参加できる流れとなっていました。素敵な演奏を聴きながら、できるだけ全てに参加できるように会場と全体の配置が上手に考慮されていました。

地域防災活動のあたらしい視点

～前回までのご発言や最近の様子から

●防災マップづくり、図上訓練、避難所開設、室内安全対策、耐震化といったことがテーマとして取り入れられるようになってきている

●時間の変化やエリアにより、具体的災害イメージを高めたり、参加者の広がりも考え、学びや訓練の多様な組み合わせを行う

●訓練のマンネリ化を避けると同時に、活動をよりよく楽しく広げるため「評価」の視点を入れる(参考資料添付)



防災活動を、日常をより良くし、不安を低減し、信頼関係を築ける人間力を育むための、夢のあるツールとしてもっと上手に語っていけるような気がいたします

- 地域を再発見する視点（まちを、ひとを、暮らしを）は、生きる意味の再発見ではないでしょうか？
- 自分の命を大切に考え守る力をつけることが、お友だちや家族・近所の人を大切に思う気持ちにつながってほしい。そして子ども・若者の未来の自立や自信にも、そっとつながっていきますように・・・
- 災害時要援護者の存在は、わたしたちみんなの人権・福祉を高めてくれると思うのです
- 防災が求める「総合性」「地域力」の視点は分権社会の視点でもあるのではないのでしょうか・・・

総合性を実現するには、せめてキーパーソンは、総合的な視点や、幅のあるネットワークもっているとよいのかもしれない・・・

- 他領域については、薄くてもよいので、広く横断的な知識と、連携
(ハードとソフト、自主防災活動とボランティア、地域と企業防災 etc が互いが互いを、また地域主体のアンケートとか)
- 災害そのものを立体的にイメージする“目”と材料
(時間軸・空間軸、要素のつながりで発災から復興までイメージ →領域横断的な想像力と連携・実践 →効果的な防災/減災政策・活動へ)

被害の連続性から災害イメージを高め、防災・減災をみんなで総合的に考える

別途資料参照（配布なし、投影のみ）

リスクを前提としながらも、希望と元気をもって取り組むことができる、そんな防災活動を、防災を語り広める言葉を、たくさん生み出していけないでしょうか

- 多様な防災メニューの、わかりやすい提示
- 日常のリスク低減や住みよいまち・家づくり、歴史・地域の文脈に関連させる
(防災風味、防災の味付け)
- 地域の実情・対象に合わせた有効なメニューの選択・組み合わせと実施
(多様な参加と連携へ)
- 行政・防災関連機関の領域横断連携も実際の防災活動の中で日常的に実践されるように
- うちの自治体・地域の防災まちづくりチェック項目づくりと定点評価・提言？
(子どもや女性、障害者などの視点も優しく取り入れる。また簡単に「誰さんと誰さんはお知り合いですか？」「大人と子どものあいさつが増えましたか？」「子ども防災キャンプ参加人数」「避難所運営マニュアルの住民点検実施率」といった親しみやすい項目を考えていく) など